教師志望動機と高校・大学生活
～教員採用試験合格者の場合～

藤　原　正　光*

The Motivation to be a School Teacher and His or Her high school and university day's Life
― about successful applicants of teacher's employment test ―

Masamitsu FUJIHARA

平成９年度から平成15年度までの教員採用内定者344名を対象に，教師志望動機，高校・大学時代の生活を中心に，当該年度ごと別々にアンケート調査した．教師志望動機の構造として多変量分析（因子分析），クラスター分析，判別分析の結果，因子１（外的要因：対人関係），因子２（内的要因：向性），因子３（より深い内的因子：充実感）が抽出され，因子２と因子３，つまり「子どもが好き」，「恩師の生き方」，「教師という職業への憧れ」，「性格が教師向き」，「子どもとの活動の充実感」などが深く関わっていることが確認された．

高校時代と大学時代の生活を，学業成績，クラブ活動の熱心さについてピアソンの積率相関により分析した．高校時代の成績と大学の成績には負の相関が有意に認められ，大学入学後一生懸命学習していた．クラブ活動には正の相関が認められ．高校・大学ともに熱心に取り組んでいた．

目　的

近年，小学校教員の採用枠は首都圏を中心にやや拡大傾向にあるが，中学校や高等学校教員採用枠は依然として厳しい状況にある．しかしながら，多くの学生が，将来，教員職を選択したい希望を持っている．本稿では，大学卒業時に教員採用試験に合格した者を対象に，教師志望動機の構造や形成過程を調べるとともに，彼らの高校時代と大学時代の生活を学業成績およびクラブ・部活動との関係から検討することを主な目的としている．

まず，教師志望動機についてのこれまでの研究を概観しよう．比較的古い研究になるが，森　孝子(1969)は，日米学生の教職選択に及ぼす要因の研究の中で，教職選択の際，内面的価値（人間関係，知的，倫理的）を外面的価値（物理的，経済的，社会的）より重視しており，この傾向は男性の方がより強いと述べている．

小川一夫・田中宏二・上野徳美（1983，1984）は，長年教師を経験した退職者を対象に，教師志望動機を調査研究している．積極的な志望動機として，憧憬型，適職型，価値志向型（教職という仕事自体に魅力），自発的相続型の４つ型に，消極的な志望動機として，被勧誘型，消極的相続型，漠然型の３つの型に分類している．結果は，積極的動機の

* ふじはら まさみつ　文教大学教育学部心理教育課程

者の割合は，男性教師47%，女性教師53%で，女性教師の方が幾分高い積極的志望動機をもっていたと述べている．

藤原正光・仙崎　武（1984）は，教育学部在学生を対象に「教育学部を選んだ動機」を調査している．これは，厳密な意味では教師志望動機とはいえないが，教員養成を目的としている学部の特性上，教師志望動機とかなり近い意味を持っていると考えられる．結果は，「子どもを教えるのが好き」，「性格が合っている」，「自分の能力・実力が発揮できる」などが多く選択されていた．また，女性の方が「給与の安定」，「親に勧められて」といった項目により多く回答していた．

これらの結果を総合すると，教師志望動機は，子どもが好きであることを前提に，知的で倫理的で自分の能力を発揮できるといった自己実現的な要因がかなり影響していると考えられる．しかし，より詳しい検討のためには，教師志望動機の構造的な分析が必要となろう．

このような教師志望動機はいつ頃決定されるのだろうか．教職進路決定時期に関する研究を概観する．藤原ら（1984）の教育学部進学決定時期の調査結果では，男女ともに高校生になってからが7割以上を占めているが，女子の方が小・中学校のかなり早い時期に決定していた．一般には，大学進学は小・中学校のときに決定され，教育学部への進学は高校段階でなされるとされている．

教師という職業選択は，学校生活を通してのさまざまな教科の学習やクラブ・部活動および課外活動と大きく関わっている．本研究では，教員内定者の高校時代と大学時代での生活を，学業成績，クラブ活動，アルバイト経験から検討する．

方　法

調査対象　この調査は，文教大学教育学部，人間科学部，文学部，教育専攻科の在校生で，平成９年度から平成15年度にかけて教員採用試験に内定した者344名を対象に実施した．男女の内訳は，男性136名（39.5%），女性208名（60.5%）であった．

採用が内定した都道府県は，東京112名(32.8%)，埼玉県94名（27.6%），千葉県37名(10.9%)，神奈川県16名（4.7%），その他85名（24.7%）であった．

表１　アンケート実施年度と調査対象者

実施年度	教育学部	人間科学部	文学部	専攻科	合計
平成９年度	44	3	2	6	55
平成10年度	22	0	4	13	39
平成11年度	33	0	5	6	44
平成13年度	35	0	0	8	43
平成14年度	55	0	2	5	62
平成15年度	52	1	5	7	65
合　計	265	4	19	56	344

内定者の学校区分は，小学校290名（84.5%），中学校31名（9.0%），小・中学校12名（3.5%），高校２名（0.6%），養護学校８名（2.3%）であった．

手続き　調査方法はアンケート形式であり，各年度の教員採用内定が決定した後実施された．調査項目の概要は次のとおりである．①教師志望動機14項目（表２参照），②教職を決定した時期，③出身高校の校種（自己評定）：進学校，普通高校，新設校，職業高校，④高校３年次の成績（自己評定）：上位，中位，下位，⑤高校時代のクラブ活動，⑥高校時代のクラブ活動の自己評定（４件法）：不熱心～非常に熱心，⑦大学時代のアルバイト経験，⑧大学時代の成績の自己評定（AAとAの数），⑨大学時代の所属クラブ（３年次），などであった．

結果と考察

Ⅰ　教師志望動機

教師志望動機は，それぞれの項目への回答の度合いを量的に比較検討し動機の構造を検討する目的で，単純集計と多変量解析とに分けて分析した．各項目への回答方法は，全くそう思わない（１点），そう思わない（２点），どちらともいえない（３点），そう思う（４点），まったくそう思う（５点）の５段階評定であった．

教師志望動機の項目中，「教師は重要な職業である」（平成13年度のみ削除）と「なんとなく選んだ」（平成14年度と平成15年度に削除）の２項目は，質問項目作成上のミスで当該年度には調査されなかった．しかし，回答頻度がかなり多いため分析の対象とした．

１．単純集計からの分析

教師志望動機を示す項目のうち，平均評定値が「３以上」のものは，「子どもが好き」，「教師は重要な職業である」，「恩師の生き方」，「教師への憧れ」，「性格が教師向き」，「子どもとの活動に充実感を感じる」，であった．（表２参照）

表２　教師志望動機（5段階評定）

	平　均	標準偏差	度　数
①教師への憧れ	3.79	1.35	344
②恩師の生き方	3.99	1.11	344
③子どもが好き	4.30	0.84	344
④性格が教師向き	3.69	0.90	344
⑤教師は重要な職業	4.14	0.92	302
⑥子どもとの活動に充実感	3.49	1.52	344
⑦教師の親・親戚の生き方	2.10	1.42	344
⑧教師の親・親戚を乗越え	1.78	1.06	342
⑨恩師・知人に勧められて	1.66	0.89	344
⑩友達から勧められて	1.44	0.85	344
⑪教師の親・親戚の勧誘	1.56	1.00	342
⑫安定した職業	1.59	1.02	344
⑬なんとなく	1.25	0.65	218
⑭教採に合格したので	1.51	0.99	344

調査対象は当該年度の教員採用内定者の在学生であり，かなり高い積極的な教師志望動機に基づくものであった．この結果は，教師志望動機は，内面的価値に基づくものであり（森　1969），かなり積極的動機から出発しており（小川ら　1983，1984），性格や自己実現の高い可能性に依拠している（藤原ら　1984），とする従来の知見をかなり支持するものであった．

２．多変量解析からの分析

教師志望動機の構造を検討する目的で因子分析（主成分分析）とクラスター分析，さらに，正準判別関数による判別分析を実施した．項目番号（表2参照）⑤，⑫，⑬は，サンプル数が不ぞろいであり，ペアーにできない，寄与率が低い，といった理由で結果の分析から削除した．

１）因子分析からの分析

教師志望動機11項目を因子分析（主成分分析法）した．因子１は，「教師の親・親戚の生き方（親生き方）」，「教師の親・親戚の勧誘（親・勧誘）」，「教師の親・親戚を乗越えたい（親乗越え）」，「友達から誘われて（友達勧誘）」，「恩師・知人に勧められて（恩師勧誘）」を抽出し，外的要因（対人関係）と命名した．因子２は，「教師への憧れ（憧れ）」，「出会った教師の生き方（出会い教師）」，「子どもが好き（子ども好き）」，「性格が教師向き（性格）」を選び，内的要因（向性）と命名した．因子３は，「子どもとの活動に充実感（充実感）」のみであり，深い内的要因（充実感）と名づけた．（表３参照）

表３ 教師志望動機の因子分析(主成分分析:11項目)

	因子１	因子２	因子３
①憧れ	0.189	0.779	0.423
②恩師生き方	0.210	0.618	0.216
③子ども好き	0.097	0.627	- 0.017
④性格	0.285	0.333	0.000
⑥充実感	0.571	0.237	- 0.768
⑦親生き方	0.870	- 0.067	0.179
⑧親乗越え	0.589	- 0.256	0.379
⑨恩師勧誘	0.390	- 0.336	0.111
⑩友人勧誘	0.503	- 0.298	0.129
⑪親・勧誘	0.663	- 0.351	0.179
⑭合格した	0.196	- 0.513	0.155
負荷量合計	2.483	2.207	1.076
分 散 の %	22.576	20.065	9.784
累　積　%	22.576	42.641	52.425

２）教師志望動機のクラスター分析と判別分析

教師志望動機の因子分析の結果を基に，さらにその構造を視覚的に明らかにする目的でクラスター分析と判別分析を行った．

⑴クラスター分析

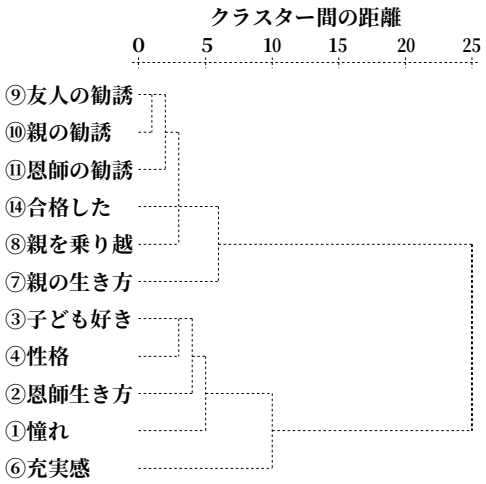

図１　教師志望動機のクラスター分析

図１の結果は，友だち・教師である親・恩師からの「勧誘」と教師である親の生き方や教師である親を乗越えたいとする「願望」が一つのクラスターにまとめられている．合格したからという消極的な動機は，親を安心させたいとする「願望」が働いていた結果かもしれない．外的要因である対人関係を表すクラスターである．第二のクラスターは，子ども好き，教師向きの性格，恩師の生き方，教師への憧れ，などの静的な内的要因（向性）であり，第三のクラスターに，子どもとの活動に充実感といった動的な内的因子が分類されている．

⑵　判別分析（正準判別関数）

教師志望動機11項目へのすべての回答を，正準判別関数の技法を用いて判別分析した．判別分析とは，２つの独立した関数を軸とした２次元の図上に，すべての回答（344）をプロットし，どのようなグループに分類されるかを検討する技法である．ここでは，因子分析の結果得られた外的要因（対人関係）を関数１とし，内的要因（向性）を関数２として次元を設定した．その結果．次のような特徴を持つ４つのグループに分類された．

第１グループ：対人関係はどちらともいえず，向性も低い

第２グループ：対人関係は幾分考慮しており，向性はかなり高い

第３グループ：対人関係は考慮しておらず，向性は高い

第４グループ：対人関係は考慮しておらず，向性はどちらともいえない

各グループへのプロット（含まれる）状況は，次のとおりである．

第１グループは，非常にまばらであり，ごく少数ケースから構成されている．

第２グループは，かなりのケース数が認められるが，比較的分散している．

第３グループは，最も密集したグループ形成をしており，ケース数も最も多い．

第４グループは，第３グループに次いで密集度が高く，ケース数も多い．

以上，判別分析の結果をまとめると，教員志望動機の構造は，教師の親や恩師や友だちからの「勧め」といったことより，子どもが好きであり，教師に憧れ，恩師の生き方に感動し，自分でも教師に向いている性格である，と認識していることにある．内的要因が強く働いている．

３．単純集計結果と多変量解析結果と考察のまとめ

単純集計結果では，「子どもが好き」，「教師は重要な職業である」，「恩師の生き方」，「教師への憧れ」，「性格が教師向き」，「子どもとの活動に充実感を感じる」は，平均評定値が３以上の高い得点を示していた．

多変量解析の因子分析では３つの因子を抽出し，第1因子を外的要因（対人関係），第２因子を内的要因（向性），第3因子を深い内的因子（充実感）とした．

クラスター分析では，因子分析の結果を裏付ける３つのクラスターに分類することができた．

判別分析では，関数１を対人関係，関数２を向性として２次元の図上にプロットしたところ，ほぼ単純集計結果を裏付ける結果が得られた．

これらの知見を総合的に判断すると，教員採用試験内定者の教師志望動機は，教師である親や恩師や友だちに「勧められた」という対人関係要因よりも，子どもが好きであり，教師は重要な職業である，恩師の生き方に感動し，教師への憧れが生まれ，自分の性格は教師向きである，といった内的要因（向性）に強く影響されている．また，子どもとの活動に充実感を感じるなどの深い内的要因，生きがいや自己実現，価値観といった側面からさらに研究する必要がある．

Ⅱ　教員採用内定者の高校と大学時代の生活

１．高校時代の生活

出身高校の校種（自己評定）は，進学高校の出身者は245名（71.0%），普通高校は90名（26.1%），新設高校9名（2.6%），職業高校１名（0.3%）であり，約7割が進学高校の出身者であった．

高校３年次の成績（自己評定）は，上位者107名（31.0%），中位者162名（47.0%），下位者76名（22.0%）であった．中位者と下位者を合計すると238名（69.0%）である．

高校時代のクラブ活動は，文化会系105名（30.4%），体育会系196名（56.8%），届出団体５名（1.4%），無所属36名（10.4%）であり，約9割の生徒が何らかのクラブ活動を行っていた．

クラブ活動への態度（自己評定）は，非常に熱心176名（51.0%），熱心87名（25.5%），どちらともいえない32名（9.3%），不熱心13名（3.8%），無所属37名（10.7%）であり，非常に熱心と熱心とを合計すると263名（76.5%）である．

これらの結果を総合すると，教員採用内定者の高校時代の生活は，進学高校の出身者が約7割であり，高校3年次の成績は中位以下の者が約7割であり，クラブ活動には7割以上の生徒が熱心に取り組んでいた様子が伺える．

２．大学時代の生活

アルバイトの経験は，大学３年時では，無就労46名(13.3%)，週１回～２回125名(36.2%)，週3回以上134名（38.8%），長期の休み24名（7.0%），その他16名（4.6%）であり，約87%の学生が何らかの形でアルバイトを経験している．

大学４年時のアルバイト経験は，無就労143名（41.4%），週１回～２回123名（35.7%），週3回以上48名（13.9%），長期の休み７名（2.0%），その他23名（6.7%）であり，

アルバイト経験者は59%に激減している．

大学時代の成績（AAとAの数の自己評定）は，50科目以上111名（32.2%），21科目～49科目169名（49.0%），20科目以下32名（9.3%）であった．21科目以上AAやAの評定を受けている学生が81.2%であり，まじめに学習に取り組んでいる様子が伺える．

大学３年時のクラブ活動は，文化会系104名（30.1%），体育会系104名（30.1%），届出団体75名（21.7%），無所属75名（21.7%）であった．比較する意味で，文教大学越谷キャンパス全体の所属クラブの%をあげると，文化会系21.1%，体育会系16.6%，届出団体21.3%，無所属59.0%である．無所属者の%を比較すると，教員採用内定者の割合は圧倒的に少ない．

クラブ活動への態度（自己評定）は，非常に熱心158名（45.8%），熱心64名（18.6%），どちらともいえない33名（9.6%），不熱心18名（5.2%），無所属71名（20.6%）であり，非常に熱心と熱心とを合計すると222名（64.4%）である．

これらの結果を総合すると，アルバイト経験は大学３年時で89%であったものが４年時では59%に激減している．大学時代の成績は８割以上のものがAAやAを21科目以上取得しており，学習にまじめに取り組んでいる．また，クラブ活動への所属は約8割であり，65%の学生が熱心に取り組んでいる．

３．高校と大学時代の成績とクラブ活動の比較

高校と大学時代の学業成績とクラブ活動の比較（自己評定）をピアソン（Pearson）の積率相関係数を用いて行った．（表４参照）

高校の成績と大学の成績には負の相関（-0.134）が$p<.05$で得られた．また，高校と大学のクラブ活動との間に正の相関（0.159）が$p<.01$で，大学の成績とクラブ活動の間に正の相関（0.116）が$p<.05$で得られた．

表４　高校と大学の学業成績とクラブ活動の相関

	高校・成績	高校・部活	大学・成績	大学・部活
高校・成績		0.008	-0.134*	0.045
高校・部活	0.008		0.023	0.159**
大学・成績	-0.134*	0.023		0.116*
大学・部活	0.045	0.159**	0.116*	

注　数値はPearsonの相関係数
＊：$p<.05$、＊＊：$p<.01$

これらの結果は，次のように解釈できる．学業成績については，高校時代はあまり芳しい成績ではなかったが，大学に入ってからよく勉強して成績が向上している．また，クラブ活動は，高校時代と同じように大学でも熱心に活動しおり，大学ではクラブ活動も勉強も一生懸命であり両立している．

４．教職進路決定時期

教職を決定した時期は，小学校入学前15名（4.4%），小学校時代142名（41.6%），中学校時代74名（21.6%），高校時代79名（23.2%），浪人中8名（2.3%），大学時代23名（6.8%）であった．累積パーセント率でみると，中学3年生で60%の者がすでに教職に就くことを決定している．

図２に，男女別の教職決定時期を示した．小学校時代までに，女性75名（55.9%）男性42名（30.8%）が決定していた．また，高校時代では，女性36名（17%），男性33名

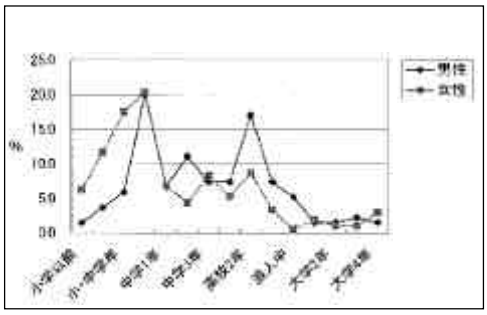

図２　教職を決定した時期（性別）

（31.8%）であった．このように，半数以上の女性は小学校段階で決定し，その後，徐々に減少しているのに対し，男性の進路決定時期には，小学校時代と高校時代に２つの山が見られる．

藤原ら（1984）の教育学部決定時期の調査結果では，男女とも高校生になってからが約7割であり，今回の調査結果とは異なるものである．教員採用内定者は，かなり早くから教職に就く意思決定をしていることが示された．

要　約

平成９年度から平成15年度にかけて現役教員採用内定者344名を対象に，教師志望動機，高校時代と大学時代の学生生活，教職選択の決定時期について，年度ごと別々にアンケート調査を実施した．

教師志望動機には，「子どもが好き」，「恩師の生き方」，「教師への憧れ」，「性格が教師向き」，「子どもとの活動の充実感」などが強く影響していた．因子分析の結果，　因子１（外的要因：対人関係）として「教師である親や親戚の人の生き方」，「教師である親や親戚の人からの勧め」，「友だちの勧め」，「恩師や知人からの勧め」が抽出され，因子２（内的因子：向性）として上述した強く影響していた動機が抽出され，因子３（深い内的因子：充実感）として「子どもとの活動の充実感」が抽出された．クラスター分析と判別分析の結果，教師志望動機には因子２が大きく影響していることが確認された．また，深い内的因子（充実感）は，自己実現や価値観の側面からさらに検討すべきであると思える．

教員採用内定者の約７割が進学高校の出身者であった．高校時代の成績は約7割が中位から下位であった．しかし，クラブ活動には熱心に取り組んでいた．大学時代には約9割がアルバイトを経験していたが，成績は優秀であり，約8割の学生がクラブ活動に熱心に取り組んでいた．高校と大学の成績には負の相関が，クラブ活動には正の相関が，大学の成績とクラブ活動には正の相関が認められた．

教職を決定した時期は，小学校時代までが46%であり，かなり早い進路決定であった．女性は56%がこの時期までに決定していた．男性にもほぼ同様な傾向が見られるが，高校時代に決定する者もかなりいた．

引用文献

小川一夫・田中宏二・上野徳美　1983　教師資質の形成と構造に関する研究(1)　中国四国心理学会論文集　16，p107

小川一夫・田中宏二・上野徳美 1984 教師気質の形成と構造に関する研究(2)－教師における停滞期－　中国四国心理学会論文集　17，p92

藤原正光・仙崎　武　1984　教職志望学生の進路形成(1)　進路指導研究　５，ｐ１～５

森　孝子　1969　日米学生の教職選択に及ぼす要因　－比較教育学における行動科学的研究試法－　36(3)，ｐ12～21